ご注意：本書は正式な取り扱い説明書ではありません。

　本書は取り扱い説明書から注意文など製品の操作方法について直接関係のない部分や余白などを削除、修正したもので、操作方法が分からなくなったが説明書が手許にないとか、製品に興味があるが操作方法はどのようになっているのか先に知りたい、といった目的のために無償でご提供しています。正しくお使い頂くためには必ず製品に同梱されている説明書をお読み下さい。又、本書が完全な説明書では無いことに対するクレームは一切お受け致しませんので、予め御理解ください。
　１：正式な説明書は無線機販売店でご購入いただけます。詳しくは下記の弊社ウエブサイトをご参照ください。http://www.alinco.co.jp/denshi/14.html
　２：アマチュア無線機の場合、無線局免許状の書き方は申請書式や技適基準改正により変更になっているものがたくさんあります。http://www.alinco.co.jp/denshi/10.html　に技適番号やデジタルモード（音声・パケット）に関する情報を掲載しておりますので、合わせてご確認ください。
　３：本書に記載の付属品・オプションアクセサリー・定格などは予告無く変更されているものがあります。最新の情報は弊社ホームページに掲載されています。
その他、動作や操作に関する良くあるお問い合せは：
http://www.alinco.co.jp/denshi/11.html　のＦＡＱページをご覧ください。

＊ＤＲ－０３ＳＸとも、チャンネルステップの換え方やメモリーの仕方など基本の操作は本書で説明しているものと同じです。

アルインコ（株）電子事業部

ALINCO

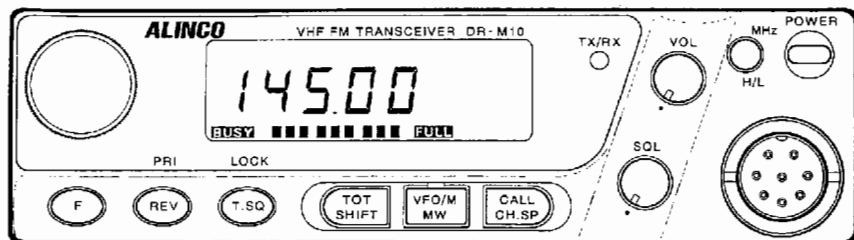
VHF FM MOBILE TRANSCEIVER

DR-M10DX/HX

UHF FM MOBILE TRANSCEIVER

DR-M40DX/HX

VHF FM MOBILE TRANSCEIVER

DR-M06DX

取扱説明書

アルインコのトランシバーをお買い上げいただきまして、誠にありがとうございます。本機の性能を十分に発揮させて効果的にご使用いただくため、この取扱説明書をご使用前に最後までお読みください。また、この取扱説明書は必ず保存しておいてください。ご使用中の不明な点や不具合が生じた時にお役に立ちます。

本取扱説明書内の記述はDR-M40DX、DR-M40HXに特有の機能以外はDR-M10DX、DR-M10HXの表示を中心に説明しております。周波数表示が変わるだけで運用法方には違い有りません。

アルインコ株式会社

本機は日本国内専用モデルですので、外国では使用出来ません。

この無線機を使用するには、郵政省のアマチュア無線局の免許が必要です。また、アマチュア無線以外の通信には使用できません。

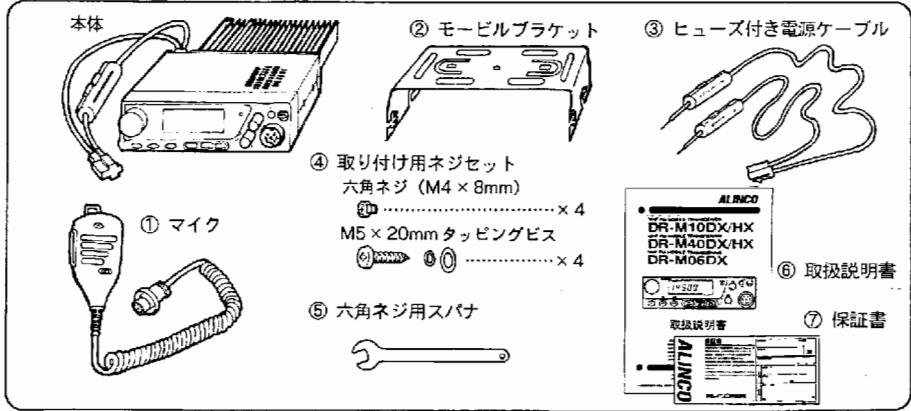
1 ご使用の前に必ずお読みください

■本機は次の大きな特徴を持つ無線機です。

- 100チャンネル分のメモリー容量があるE²P・ROMを標準装備とし、飛躍的に使いやすくなりました。
- 50波のトーンエンコーダーも標準装備され（デコーダーオプション）、グループ交信を更に楽しく行うことができるようになりました。

■本取扱説明書に記載されている場合を除き、ケースなどを外し、内部にふれることはさけてください。内部に手をふれると感電、故障の原因になることがあります。
■直射日光に当たる所、暖房器具など発熱物の近くはさけてください。
■花瓶、化粧品など水の入ったものは、セットの上に置かないでください。また、湿度の高い所はさけてください。
■放熱をよくするため、壁から10cmくらい離してください。
■ほこり、振動の少ない安定した場所にセッティングしてください。
■本セットはDC（直流）13.8V（－）接地用です。
■DC（直流）安定化電源を使用する場合、ぬれた手でAC（交流）電源のプラグを抜き差ししますと、感電するおそれがありますので、絶対にしないでください。
■チューナー、テレビなど、他の機器に影響を与えるようなときは、距離を離して設置してください。
■電源コードを無理に引き抜いたり、折りまげたりしないでください。また、継ぎ足しすると、通電しなくなったり、ショートのおそれがありますのでしないでください。
■万一、煙が出たり、変な臭いがする場合は、電源スイッチをすばやく切り、電源コードを抜いてください。速やかに購入店または最寄りの当社サービス窓口へご連絡ください。
■湿度の高い所や、冷たい所から急に暖かい所へ移動しますと、製品に露がつく場合があります。露がつくと製品の動作に悪影響を与え、故障の原因になりますので、よく乾燥させ、露をよく取り除いてからご使用ください。

付属品

① マイク……………………×1
② モービルブラケット…………×1
③ ヒューズ付き電源ケーブル……×1
④ 取り付け用ビス………………×1セット
⑤ 六角ネジ用スパナ……………×1
⑥ 取扱説明書……………………×1
⑦ 保証書…………………………×1

運用時のご注意

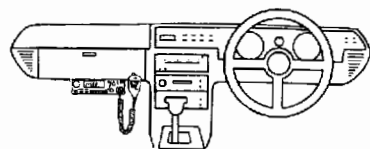
■電波を発射するまえに
ハムバンド近くでは、多くの業務無線局が運用されています。これらの無線局の近くで電波を発射するとアマチュア無線局が電波法令を満足していても、思わぬ電波障害を起こすことがありますので、移動運用などでは充分ご注意ください。特につぎのような場所での運用は原則として行わず、必要な場合は管理者の承認を得るようにしましょう。①航空機内 ②空港敷地内 ③新幹線車両内 ④業務無線局及びそれらの中継局周辺 ⑤病院内及びその周辺。

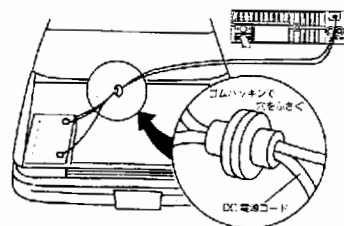
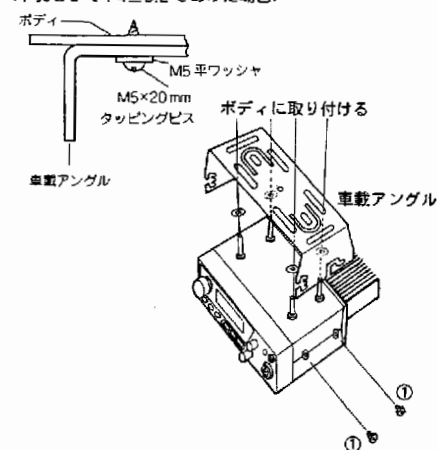
もくじ

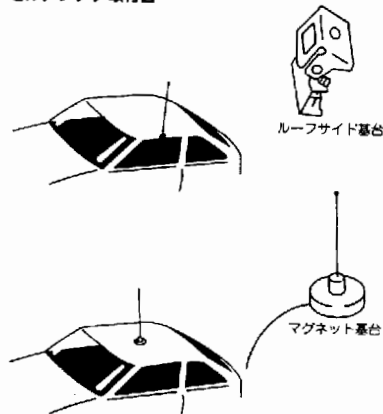
② 電源のつなぎ方と設置方法

モービル（自動車）で運用する場合

①取付場所

ご使用の車種により、車内レイアウトは異なりますが、操作性、安全運転の面から最適と思われる場所を選ぶようにしてください。とくに、ひざが本機にあたらないような場所を選んでください。また、直接振動が伝わる場所や、カーヒーターの吹き出し口など車内温度が上昇するような場所は避けてください。

②電源の接続方法

本機はDC（直流）13.8V用です。トラックなどの24Vバッテリーの車には直接接続することができません。また、[－]（マイナス）接地車でご使用ください。まれに［＋］（プラス）接地車がありますので、そのような場合は最寄りの販売店または当社サービス窓口でご相談ください。なお、車載でご利用の場合はバッテリーに直接接続してください。シガープラグを使用されますと、電源の供給が不安定になることがありますので、本機の性能が保持されません。

③車載アングルの取付方法

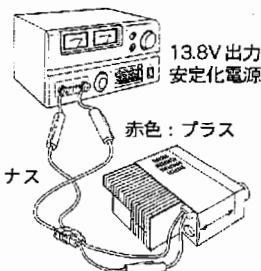
右の図のように車載アングルを車に取り付けた後、まず4本の六角ネジを本体に軽く取り付けます。六角ネジ①を車載アングルの溝に先に入れ、押し上げながら後方に押し込んでください。同時に六角ネジ①を車載アングルの前の溝に入れてください。車載アングルの前の溝は3つありますから、本機を操作しやすい角度にセットしてください。最後に、本機を付属のスパナで車載アングルにしっかりと固定してください。

④モービルアンテナの取付方法

アンテナに接続する同軸ケーブルは50Ωのものをお使いください。特に、430MHz帯では、なるべく損失の少ないものでインピーダンスが必ず50Ωの430MHz用アンテナをご使用ください。モービルアンテナは、車のボディにアンテナを固定するための基台を設置する必要があります。走行中に脱落することのないように、確実に取り付けてください。

固定（ご家庭）で運用する場合

①電源について

ご家庭でご使用になるなど、固定局として本機をご使用になる場合、直流安定化電源が必要となります。直流安定化電源は、約15A以上の電流容量のある電源をご利用ください。当社の電源を使用されることをおすすめします。本機と安定化電源との接続は、赤色の線が電源の［＋］(プラス)、黒色の線が［－］(マイナス）に接続します。

接続には付属の電源用リード線（DCコード）で配線してください。

②固定用アンテナについて

アンテナは交信するうえにおいて、とても重要な要素となります。性能のよいアンテナをお選びください。市販されているアンテナには、無指向性（すべての方向に電波の出入りがある）のグランドプレーンアンテナや、指向性（ある方向にのみ電波の出入りがある）のある八木アンテナなどがありますので、運用目的や設置場所に応じてお選びください。また、同軸ケーブルはできるだけ太いもの（5D-2V以上）をお使いになり、なるべく短くご使用ください。

禁止事項

電源の接続方法：シガープラグからの電源供給はおやめください。電源供給が不安定となり性能が維持されないことがあります。

本体の改造：本体の改造はおやめください。無理な改造が原因とおもわれる故障等については保証期間内であっても保証がきかなくなるうえに修理をお断わりする場合もあります。

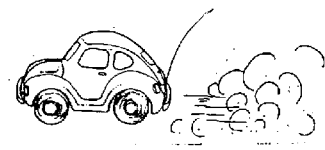
③ 各部の名称とその機能！

[フロントパネル]

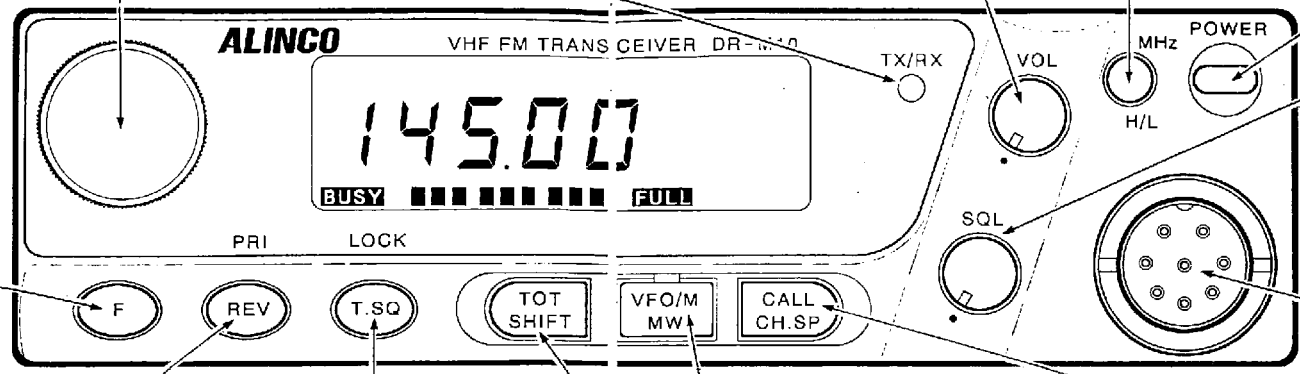
メインダイヤル
送信・受信の周波数を変更したり、メモリーの操作をしたときにはそのメモリーチャンネルを変更することができます。また、オフセット周波数(送信と受信の周波数を別にして運用)、トーン周波数などの変更にも使用します。

送信・受信ランプ
マイクのPTTキーを押して、送信状態になるとこのランプが赤く点灯します。また、電波を受信すると緑色に点灯します。

ボリュームつまみ
受信中の信号の音を調節するツマミ。右に回すと音が大きくなり、左に回すと音は小さくなります。

MHz・H／Lキー
周波数を1MHz単位で変更することができます。
Fキーを押して、表示部にFUNCが点灯中にこのキーを押すと、送信出力の切り替え（ハイパワーとローパワー）ができます。

電源スイッチ
電源をONしたりOFFしたりするスイッチです。

ファンクション・MONIキー
ファンクション機能を動作させるためのキーです。このキーと他のキーの組合せにより、各種の機能を発揮します。さらにこのキーを1秒以上押し続けると、モニター機能が動作して、スケルチ機能が解除され雑音が入る受信状態となります。

ALINCO VHF FM TRANSCEIVER DR-M10
145.00
BUSY FULL
TX/RX VOL MHz H/L POWER SQL
PRI LOCK
F REV T.SQ TOT SHIFT VFO/M MW CALL CH.SP

スケルチつまみ
受信中に信号が入ってこないときの雑音をカットするための調節つまみです。何も信号を受信していない状態で雑音がなくなる点にセットします。

マイクコネクタ
付属のマイクを接続します。

REV・PRIキー
送信周波数と受信周波数を別の周波数に設定したときに、送信周波数と受信周波数を切り替えるためのキーです。さらにFキーを押して、表示部にFUNCを点灯させた状態でこのキーを押すと、プライオリティ受信動作のON／OFFになります。

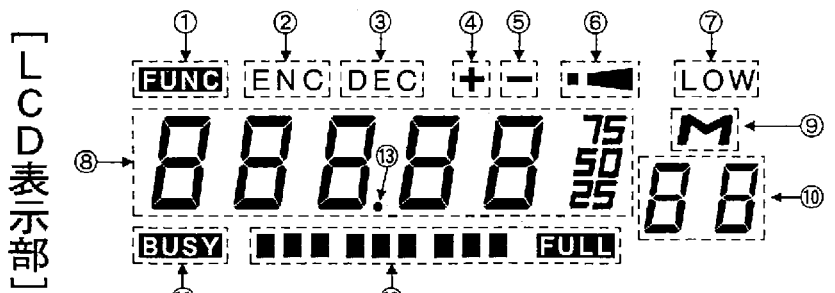
T.SQ・LOCKキー
トーンスケルチ機能を動作させるためのキーです。Fを押して、表示部にFUNCが点灯中にこのキーを押すと、キーロック機能のON／OFFとなります。

VFO／M・MWキー
VFOモードとメモリーモードとを切り替えます。Fを押して、表示部にFUNCが点灯中にこのキーを押すと、メモリーライト（メモリーの書き込み）とメモリークリア（メモリー消去）機能になります。

CALL・CH.SPキー
このキーを押すと、コールチャンネルを呼び出すことができます。Fを押して、表示部にFUNCが点灯中にこのキーを押すと、チャンネルステップ周波数の設定を行うことができます。

DR-M10・DR-M06	DR-M40
TOT・SHIFTキー 連続送信タイマーの設定を行うことができます。	**RPT・SHIFTキー** レピーター運用の設定を行うことができます。
Fを押し、表示部にFUNCが点灯中にこのキーを押すと、周波数のシフト方向（＋か－）とオフセット周波数を設定できます。	

[LCD表示部]

① FUNC　② ENC　③ DEC　④ ＋　⑤ －　⑥　⑦ LOW　⑧ 888.88　⑨ M　⑩ 88　⑪ BUSY　⑫ FULL　⑬

①FUNC：ファンクションキーを押すと、5秒間点灯します。点灯中に他のキーを押すと、ファンクション機能が動作します。
②ENC：トーンエンコーダを設定したときに点灯します。
③DEC：トーンデコーダを設定したときに点灯します。（オプション装着時のみ）
④ ＋：オフセット周波数のシフト方向が＋を示します。
⑤ －：オフセット周波数のシフト方向が－を示します。
⑥常時消灯
⑦LOW：送信出力がローパワーの時に点灯します。
⑧送・受信周波数、その他各種設定値を表示します。
⑨M：メモリーモード、コールモードを設定したときに点灯します。
⑩メモリーチャンネル、コールモード設定時に点灯します。キーロック中は「FL」。プライオリティ中は「P」が点灯します。
⑪BUSY：信号を受信したときに点灯します。
⑫受信中の信号の強さを表示します。
⑬・：送信周波数、受信周波数、オフセット周波数のMHzでの区切り。トーン周波数のHzの区切りを表わします。また、点滅時はスキャン動作中を表わします。

[マイクロホン]

DOWNキー
送信周波数、受信周波数、メモリーチャンネル、オフセット周波数、トーン周波数、チャンネルステップなどを下げるためのキーです。

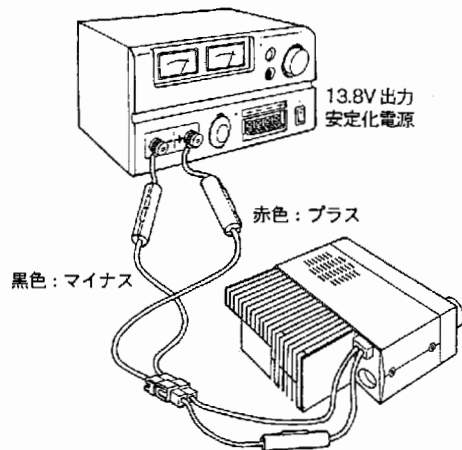
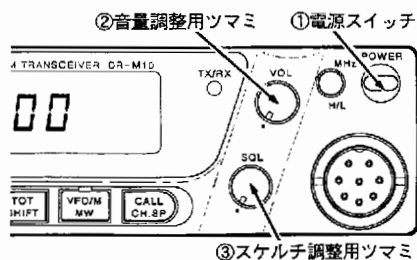
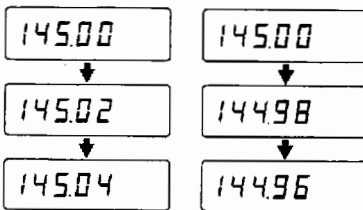
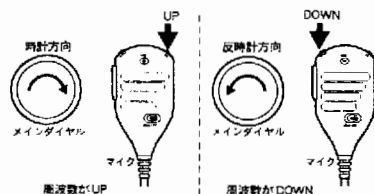
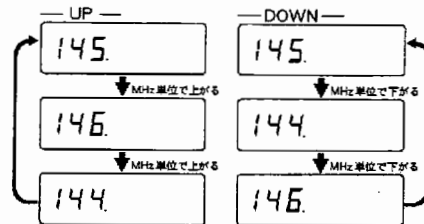
UPキー
送信周波数、受信周波数、メモリーチャンネル、オフセット周波数、トーン周波数、チャンネルステップなどを上げるためのキーです。

PTTキー
このキーを押すと送信状態となります。

UP／DOWNロックスイッチ
このスイッチをONすることでマイクのUP／DOWNキーの機能は停止します。誤動作を防止させる時に使用してください。

基本操作

この基本操作だけで簡単に通話はできる！

1.受信から始めよう！

(1) 電源ケーブルが確実に接続されているかどうか確認してください。赤いケーブルの方が＋に、黒いケーブルの方が－に接続されているかどうかを確認します。固定で使用する場合、電源の電圧は13.8Vで、電流は15A以上の容量のある電源が必要です。車のバッテリーであれば充分です。

(2) ①のスイッチを押して電源を入れます。②のツマミを少し右に回しておきます。この②のツマミは音量調整用のボリュームです。右に回すと音量が大きくなります。③のツマミはスケルチ調整用のツマミです。このツマミは信号が入ってこないときの雑音をカットするためのものです。このツマミを左に回すと表示部にBUSYと表示され、「ザー」と雑音が聞こえてきます。この③のツマミを右に回していくと、雑音が消えるポイントがありますので、このツマミはこのポイントにセットします（BUSY表示も消えます）。あまり右に回しすぎると、信号を受信しても音として出てこなくなります。

(3) ④のメインダイヤルかマイクのUPキーあるいはDOWNキーの操作により、希望周波数を決めることができます。メインダイヤルで決める場合は、右に回すと周波数が上がっていき、左へ回すと周波数は下がっていきます。また、マイクのUPキーを押すと、同じように周波数は上がっていき、DOWNキーを押すと周波数は下がっていきます。《注意》マイクのUPキー、DOWNキーを0.5秒以上3秒以内押し続けるとスキャンを開始します（スキャンの項を参照)。

(4) なお、⑤のMHzキーを押してから上記のような操作をすると、1MHz単位で周波数を変更することができます。この時、周波数の表示は、100kHz以下が消えます。この機能の解除は、もう一度MHzキーを押すか、PTTキーを押します。

(5) ②のツマミで音量を最適な音量にします。右へ回すと音量は大きくなり、左へ回すと音量は小さくなります。信号を受信すると、TX／RXのランプが緑色に点灯し、液晶表示のBUSYの表示が出て受信状態であることを知らせます。また、信号の強さに応じてバーグラフのメーターが表示されます。

2.送信をしてみる！

(1) まず電源の電流容量が充分であるかどうか確認してください。15A以上の電流容量が必要です。なお、自動車で使用する場合は自動車のバッテリーより直接接続してください。

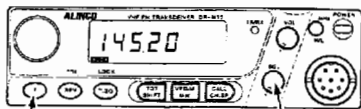
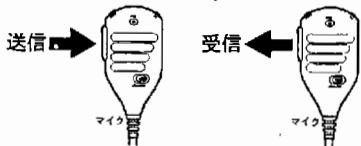
(2) アンテナケーブルのコネクタにアンテナからのケーブルが確実に接続されているかどうか確認してください。なお、アンテナはVHF機なら市販の144MHz用、UHF機なら430MHz用、50MHz用のもので、アンテナインピーダンスが50Ωのもの、耐電力が50W以上のものに限ります。自動車で運用する場合、市販のアンテナならばほとんどこの条件を満たしています。

(3) 送信したい周波数を受信のときと同じように決めます。

Fキーを0.5秒以上押し続けるか、SQLツマミを左に回す。

(4) その周波数で送信しても、他の局の通信に妨害を与えないかを確認します。スケルチつまみを左側に完全に回し切るか、Fキーを0.5秒以上押し続けてください。

(5) 妨害を与えないようであれば、マイクのPTTキーを押してください。この時、TX／RX（送信ランプ）が赤く点灯して送信状態であることを知らせます。通話をする時はそのままマイクに向かって話してください。

(6) PTTキーを離すと、受信状態に戻ります。

3.動作モード

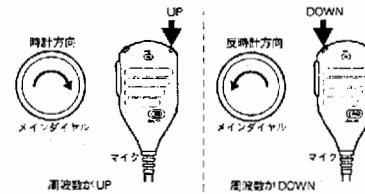
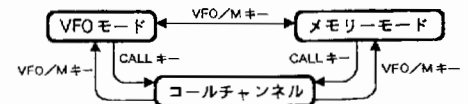
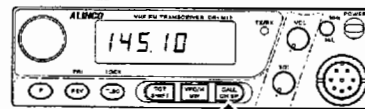
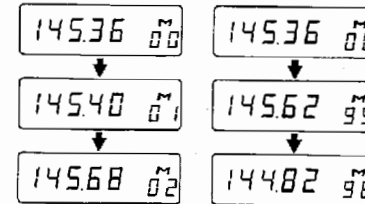
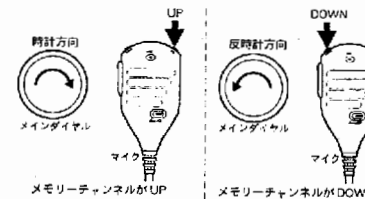
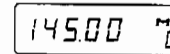
(1) VFOモード：このモードでは表示部には周波数のみが表示されます。このモードのときはメインダイヤルやマイクのUP・DOWNキーで簡単に周波数を変更することができます。周波数は、チャンネルステップ毎の変更になります（☞18ページのチャンネルステップ変更の項を参照してください）。

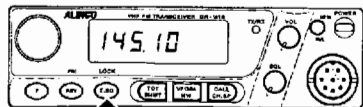
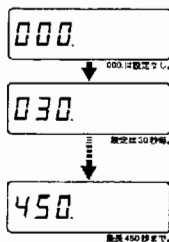
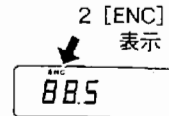
VFO／Mキー

(2) メモリーモード：VFOモードでVFO／Mキーを押すと、Mとメモリーナンバーが表示されます。これがメモリーモードで、あらかじめ記憶させておいた周波数を呼び出すことができます（☞17ページのメモリーの項を参照してください）。メモリーナンバーを変えたいときは、メインダイヤルかマイクのUP・DOWNキーを使用します。メモリーの書き込まれていないチャンネルではメモリーナンバー上のMが点滅します。メモリーできるチャンネル数は全部で100チャンネルです。

(3) コールモード：VFOまたはメモリーモードで、CALLキーを押すと、コールチャンネル（Cチャンネル）を呼び出すことができます。VFOモードあるいはメモリーモードに戻りたいときは再度CALLキーを押すと戻ります。メモリークリア（メモリーの項参照）でCチャンネルを消去したときはMが点滅して、VFOデータが表示されます。

CALLキー

ご注意 VFOモード、メモリーモードとコールチャンネルの関係は下の図の通りです。

5 応用操作

これでこの無線機はもっと楽しくなる！

1.リバース

送信周波数と受信周波数が入れ替わります。

REV キーを押すことでこの操作ができます。元に戻すときには再度REV キーを押すことで戻ります（☞16ページのオフセット設定の項を参照してください)。

2.TOT（タイム・アウト・タイマー）設定

(DR-M10DX／HX と DR-M06DX の機能)

送信時間を制限するタイマー機能です。

①TOT キーを押します。

②表示部には000と表示されます。

③メインダイヤルあるいはマイクのUP・DOWNキーを使用して時間を設定します。時間は0～450秒まで30秒毎に設定できます。

④時間を設定したら、VFO／M キーかマイクのPTTキーを押してください。これでTOT設定は終了です。

⑤送信中、設定した時間の5秒前になると、BEEP音が鳴り、設定した時間になるとOFF表示が出て、自動的に送信が停止します。自動停止後PTTキーを離すと元の表示に戻ります。

3.トーンスケルチ設定

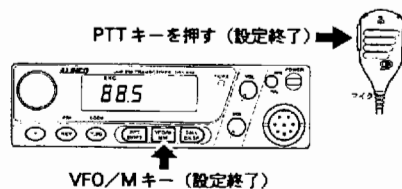
仲間とのQSOにあると便利な機能です。

トーンエンコーダとトーンデコーダの機能を動作させるための操作です。なお、トーンデコーダ機能はオプションを装着時のみ設定できる機能です。

①T.SQ キーを押すとトーンスケルチ機能になります（ENC が表示される)。DEC 表示はオプション装着時のみ表示されます。

②ENC あるいは ENC／DEC は表示中はトーン周波数が表示されます。

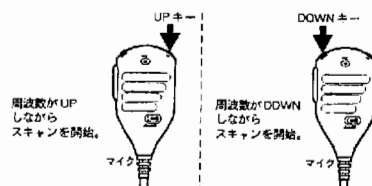
トーン周波数一覧表 (単位：Hz)

67.0	69.3	71.9	74.4	77.0	79.7	82.5	85.4	88.5
91.5	94.8	97.4	100.0	103.5	107.2	110.9	114.8	118.8
123.0	127.3	131.8	136.5	141.3	146.2	151.4	156.7	159.8
162.2	165.5	167.9	171.3	173.8	177.3	179.9	183.5	186.2
189.9	192.8	196.6	199.5	203.5	206.5	210.7	218.1	225.7
229.1	233.6	241.8	250.3	254.1				

③トーン周波数の変更はメインダイヤルかマイクのUP・DOWNキーを使用して選択します。トーン周波数は、全部で50種類です。選択できる周波数は左記の周波数です。

④トーン周波数を選択したら、VFO／M キーかPTT キーを押すことにより設定は終了します。

(注意) ENC のみ表示中はTOT タイマー動作はしません。なお、ENC または ENC／DEC 表示中に送信しますと、周波数の後に EE が表示されます。

4.スキャン機能

信号が出ている周波数を探したり、逆に空きチャンネルを探すのに便利な機能です。

(1) VFO スキャン：この機能を動作させると、受信信号がなければすぐに次のチャンネルに移り、受信信号があると、そのチャンネルで5秒間チャンネル移動を停止して、5秒後に次のチャンネルに移動します。

VFOモードでは全周波数範囲をチャンネルステップ（チャンネルステップの項参照）単位でスキャンします。

①VFOモードでマイクのUP キーあるいはDOWNキーを0.5秒以上、3秒以内押していると、スキャン機能が動作します。なお、UP キーを押した場合は周波数の高い方へスキャンしますし、DOWN キーを押した場合は周波数の低い方へスキャンします。

②スキャン中の周波数を変更することができます。これはメインダイヤルとMHz キーで変更できます。また、メインダイヤルの方向により、スキャン方向も変更することができます。

③スキャンの解除は、マイクのUP・DOWNキーのいずれかを押すことにより解除することができます。

VFO／Mキー（メモリーモードへ）

(UP/DOWNキーを0.5秒以上3秒以内押す)

(2) メモリースキャン：メモリーモードにおいて、記憶されているメモリーのみをスキャンする機能です。

①VFO／Mキーを押してメモリーモードにします。

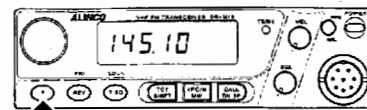
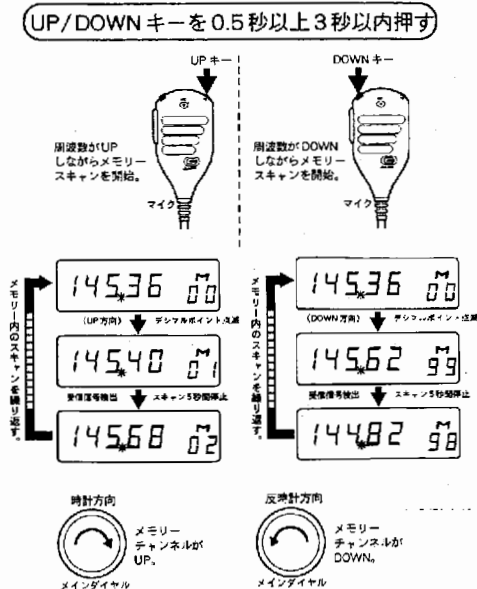
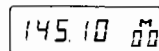
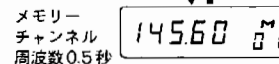
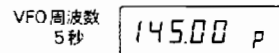
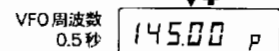
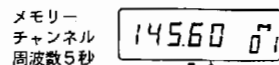
②マイクのUPキーかあるいはDOWNキーを0.5～3秒間押し続けます。

③メモリースキャンが開始して、記憶されているチャンネルが次々と受信されていきます。それらのチャンネルの中で受信信号が入ると5秒間そのチャンネルでスキャンを停止します。5秒後に次のチャンネルに移動します。

④スキャン中のメモリーチャンネルの変更は、メインダイヤルを回すことにより、スキャンチャンネルとスキャン方向を変更することができます。

⑤スキャンの解除はマイクのUPキーかDOWNキーのいずれかを押すことにより､この機能は停止します。

⑥ ファンクション機能

この機能を使いこなせば、この無線機は最高機能を発揮する！

Fキー

ファンクション機能とは、通常の機能以上の機能を発揮させることにより、運用が非常に楽になる機能です。

ファンクション機能を動作させるためには、まずFキーを押します。Fキーを押すと、表示部に5秒間FUNCと表示されます。この表示中に各キーを押すことにより、次の9項目の動作をさせることができます。なお、FUNCの表示と同時にメモリーナンバーが表示されます。これらの表示はメインダイヤルあるいはマイクのUP・DOWNキーを操作することにより、さらに5秒間延長されます。

■VFOプライオリティ

PRIキー

VFO周波数5秒

メモリーチャンネル周波数0.5秒

■メモリープライオリティ

PRIキー

メモリーチャンネル周波数5秒

VFO周波数0.5秒

1.プライオリティ

各自が重点的に受信したい周波数を優先的に受信します

プライオリティ受信中は5秒と0.5秒の受信を交互に繰り返します。VFO受信中、表示部に「P」が表示されます。0.5秒の受信モード中に受信信号が入ると、2秒間の受信延長がなされます。

(1) VFOプラオオリティ

①VFOモードでFUNCキーを押します。

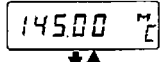
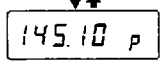
②PRIキーを押すと、VFOモード5秒、メモリーモード0.5秒で交互に受信します。

(2) メモリープライオリティ

①メモリーモードでFUNCキーを押します。

②PRIキーを押すと、メモリーモード5秒、VFOモード0.5秒で交互に受信します。

コール チャンネル 周波数5秒　145.00

VFO周波数 0.5秒　145.10 P

(3) コールプライオリティ

①コールモードでFUNCキーを押します。

②PRIキーを押すと、コールモード5秒、VFOモード0.5秒で交互に受信します。

〔プライオリティの解除〕

プライオリティ動作中に再びFUNCキーを押し、その後でPRIキーを押すことでプライオリティ動作を解除することができます。

または、マイクのPTTキーを押すことによっても解除することができます。

145.00

Fキー　T.SQキー

145.00 FL

2.キーロック

誤動作の防止。

①FUNCキーを押します。

②LOCKキーを押すと、メモリーNo.表示位置に「FL」と表示され、キーロック状態となります。

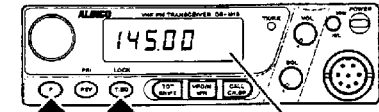
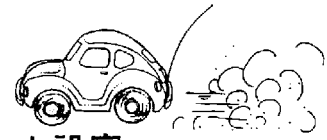
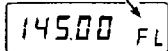
キーロック中は次のキー以外は受け付けません。

■PTT（送信）

■FUNC + LOCK（キーロックの解除）

■FUNC + LOW（送信出力の切り替え）

■FUNC（MONIキー機能）

④キーロックは、FUNCキーを押してからLOCKキーを押すことで、解除することができます。

3.オフセット設定

送信周波数と受信周波数を別に設定することができます。

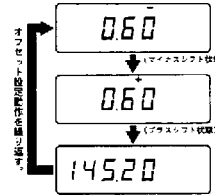
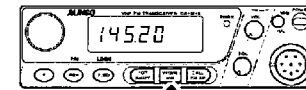
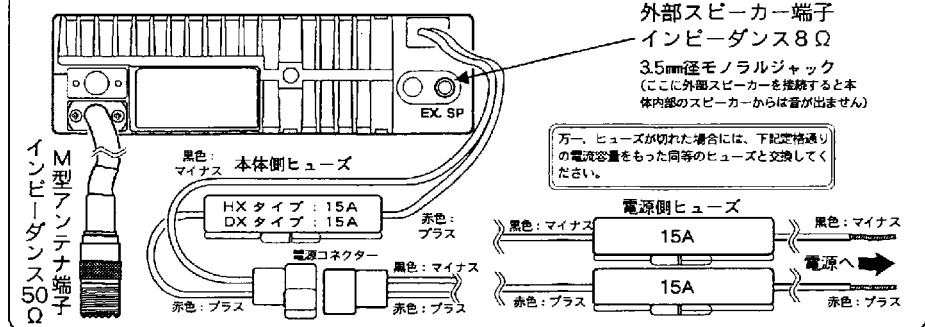
①FUNCキーを押します。

②SHIFTキーを押すと、シフトする方向が切り替わります。

〔＋シフト〕受信周波数に対して設定した周波数幅だけプラスの周波数で送信します。

〔－シフト〕受信周波数に対して設定した周波数幅だけマイナスの周波数で送信します。

③〔＋シフト〕、〔－シフト〕が表示されているときの周波数表示はオフセット周波数を表示しています。このオフセット周波数の幅を変更するときは、メインダイヤルまたはマイクのUPキーまたはDOWNキーにより変更することができます。ただし、この周波数幅はアマチュアバンド周波数幅を越えるような設定では運用することができません（例：144MHz帯で6MHz幅は運用できません）。

④VFO／MキーかマイクのPTTキーを押すことで、設定は終了します。

4.メモリーライト・メモリークリア

メモリーチャンネルに周波数を記憶させたり、記憶している周波数を消去したりします。

(1) VFOモード　＊VFOモードではメモリーは消去できません。

①VFOモードでFUNCキーを押します。

②表示部に（FUNC）が点灯中にメインダイヤルかマイクのUP・DOWNキーでメモリーチャンネルを選びます。なお、（M）が点灯のチャンネルを選ぶと、データが上書きされて、古いデータは消えてしまいます。

③MWキーを押すとデータは記憶されます。記憶することができるデータは次のものです。

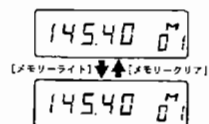
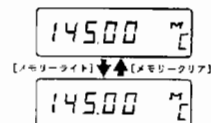
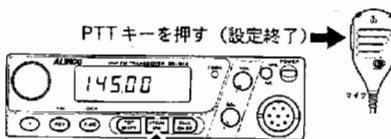
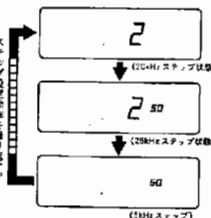
・周波数

・オフセット周波数とそのシフト方向

・トーン周波数とトーンエンコーダ／トーンデコーダの設定

(2) メモリーモード　＊「M」が点滅中に操作するとメモリーライトとなり、点灯中に操作するとメモリークリアになります。

①メモリーモードでFUNCを押します。「FUNC」が点灯中にメインダイヤルかマイクのUP／DOWNキーでメモリーチャンネルを選ぶことができます。

②MWキーを押すと、データの記憶または消去がなされます。

(3) コールモード　＊「M」点滅中に操作するとコールチャンネルの記憶、点灯中に操作するとコールチャンネルを消去することができます。

①コールモードでFUNCキーを押します。コールモードでは「FUNC」が点灯中にメインダイヤルあるいはマイクのUP／DOWNキーによるチャンネル変更はできません。

②MWキーを押すとデータの記憶または消去がなされます。

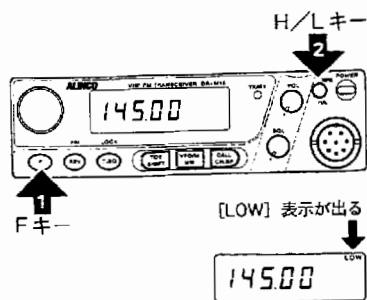
5.チャンネルステップの設定

（チャンネルとチャンネルとの周波数間隔を設定することができます。周波数、オフセット周波数、VFOスキャンのときの単位となります）

①FUNCキーを押します。

②「FUNC」点灯中にCH.SPキーを押すと、チャンネルステップ設定モードになります。

③メインダイヤルかマイクのUP／DOWNキーを押してチャンネルステップ周波数を選んでください。ステップ周波数は5KHz・10KHz・12.5KHz・15KHz・20KHz・25KHzのなかから選んでください。

④VFO／Mキーかマイクのプッシュ PTTキーを押すことで、設定は終了です。

6.送信出力の切り替え

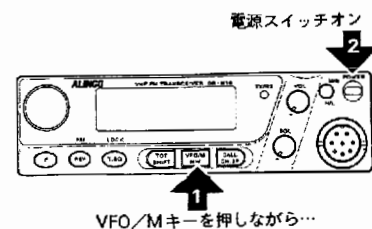
送信出力を2段に切り替えることができます。DR-M10DXは20Wと2Wに、DR-M10HXは50Wと5Wに切り替えることができます。DR-M40DXは20Wと2Wに、DR-M40HXは35Wと5WにDR-M06DXは20Wと2Wに切り替えることができます。

①FUNCキーを押します。

②「FUNC」が点灯中にH／Lキーを押すと送信出力が切り替わります。LOWパワー時には表示部に「LOW」が点灯します。それ以外の時は、ハイパワーとなります。

7.スケルチオフ機能

(スケルチつまみを操作しなくても、強制的にスケルチをオープンした状態にすることができます)

①FUNCキーを0.5秒以上押すと、MONIキーとして働き、押している間はスケルチ状態が解除されます。

8.Beep音のON／OFF

(各キーを押したときなどに鳴る音を切ったり入れたりすることができます)

①VFO／Mキーを押しながら電源を入れます。

②［①］の動作を繰り返すことにより、Beep音のON／OFFが切り替わります。

工場出荷時状態

	DR-M10	DR-M40	DR-M06
VFOの周波数	145.000MHz	433.000MHz	51.00MHz
CALL周波数	145.000MHz	433.000MHz	51.00MHz
メモリーチャンネル	OFF	OFF	OFF
シフト方向	OFF	OFF	OFF
オフセット周波数	0.6MHz	5.0MHz	0.9MHz
トーン設定	OFF	OFF	OFF
トーン周波数	88.5Hz	88.5Hz	88.5Hz
チャンネルステップ	20kHz	20kHz	20kHz
送信出力	HIGH POWER	HIGH POWER	HIGH POWER
キーロック	OFF	OFF	OFF
ビープ音	ON	ON	ON
TOT	0	——	0
RPT	——	OFF	——

9.リセット（初期化）

(通常は操作することがありません。この操作をすることで、今まで記憶させていたメモリーデータは全て消えてしまいます)

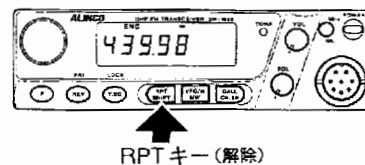
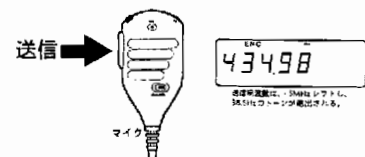
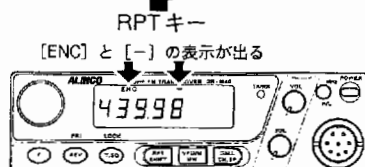
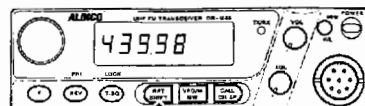
①FUNCキーを押しながら電源を入れます。

②メモリーしたデータは全て消去され、工場出荷時の状態になります。

⑦ レピーター運用

この機能を使えば、遠くの局と交信することができる！

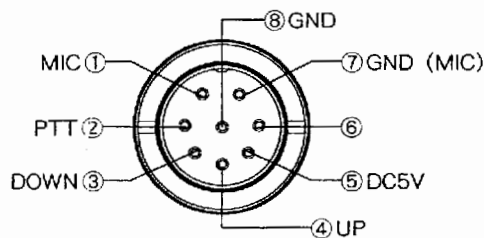
(DR-M40DX、DR-M40HXのみの機能)

《レピーターについて》レピーターとは中継局のことであり、430MHz帯の場合、日本全国に設置されています。このレピーターを使用しますと、モービル機、ハンディー機などでも遠くの局と交信することができるようになります。レピーターの受信は439.00MHz以上の周波数で20KHzセパレートで受信してみてください。その地域のレピーターが使用されていれば受信できるはずです（設置場所や周波数等はレピーターマップ等を見てください)。送信はマイナス5MHzの周波数で(例:439.76MHzで受信できたレピーターならば434.76MHzで送信する) 88.5Hzのトーンを伴った電波を発射することで、レピーターは動作して、あなたの電波を遠くまで飛ばすように中継してくれます。なお、レピーターは原則的に日本全国どのレピーターでも同じ操作により使用でき、誰でも使用することができます。実際にレピーターを使用するには、本機では下記のようなキー操作により使用することができます。

DR-M40DX、DR-M40HXにはTOTキーがないかわりに、RPTキーがあり、レピーター運用に必要な設定を簡単に行うことができます。

①VFOモードのレピーター周波数領域（439.000〜439.995MHz）でRPTキーを押します。
　レピーター運用時の設定になります。
- シフト方向［−］
- オフセット周波数［5MHz］
- トーン設定［ENC］
- トーン周波数［88.5Hz］

②再びRPTキーを押すと、レピーターモードは解除されます。
- シフト方向［なし］
- オフセット周波数［5MHz］
- トーン設定［なし］
- トーン周波数［88.5Hz］

なお、メモリーモードや、コールモードでRPTキーを押しても、レピーターセット機能は動作しません。

マイクロホン端子接続図（セットの正面より見た図）

8 保守について

アフターサービス

1. 保証書：保証書は必ず所定事項（ご購入店名、ご購入日）の記入および記載内容をお確かめの上、大切に保存してください。
2. 保証期間：お買い上げ日より1年間です。正常なご使用状態で、この期間内に万一故障を生じた場合は、お手数ですが製品に保証書を添えて、お買い上げの販売店または当社サービス窓口にご相談ください。保証書の規定に従って修理します。
3. 保証期間経過後の修理については、お買い上げの販売店または当社サービス窓口にご相談ください。修理によって機能が維持できる場合には、お客様のご要望により有料で修理いたします。
4. アフターサービスについては、ご不明な点はお買い上げの販売店または当社サービス窓口にご相談ください。

故障とお考えになる前に・・・

受信

症　状	原　因	処　置
電源スイッチを入れてもディスプレーには何も表示されない。	1. 電源の（＋）端子と（－）端子の接続が逆になっていませんか？ 2. ヒューズが切れていませんか？	1. DC電源コード（付属品）の赤色線を（＋）側に、黒色線を（－）側に正しく接続してください。 2. ヒューズが切れた原因となった修理をしてから、指定容量のヒューズと交換してください。（☞16ページ） HX：15A　DX：15A
表示が暗い。	電源電圧が低下していませんか？	電源電圧はDC（直流）13.8Vを確保してください。
スピーカーから音が出ない。 受信できない。	1. VOLのつまみを反時計方向に絞り過ぎていませんか？ 2. スケルチつまみが時計方向にいっぱい回し過ぎていませんか？ 3. トーンスケルチが動作していませんか？ 4. 外部スピーカーが接続されていませんか？ 5. マイクロホンのPTTスイッチが押されたままで、送信状態になっていませんか？	1. VOLつまみを適当な音量になるようにセットしてください。 2. SQLつまみを反時計方向に回してください。 3. トーンスケルチをOFFにしてください。 4. 本体内部スピーカーを使用する時は、外部スピーカー端子からジャックを抜いてください。 5. すみやかにPTTスイッチをOFFにしてください。
SCANキーを押してもスキャンしない。	SQLつまみの調整などがスキャン動作をするための条件になっていないのでは？	本書スキャン動作の項をご参照ください。（☞12ページ）

送信

症　状	原　因	処　置
出力が出ない。	1. マイクロホン端子の差込みが不完全ではありませんか？ 2. アンテナの接続不良ではありませんか？	1. マイクロホン端子に確実にコネクタを差し込んでください。 2. アンテナを確実にアンテナコネクタに差し込んでください。
リピーターをアクセスすることができない。	トーン周波数など、リピーターによる交信の条件を満足していますか？	88.5Hzトーンによるリピーター交信の方法はリピーター機能設定の項を参照にしてください。（☞20ページ）

9 申請書の書き方

本機によりアマチュア無線局を申請する場合、市販の申請用紙に下記の事項を間違いなく記載の上、申請してください。＊印の箇所は下記の表より、それぞれのモデルに該当する事項を記入してください。なお、HXタイプで申請する場合は、第3級アマチュア無線技士以上の資格が必要になります。本機を使用して技術基準適合証明を受ける場合は、工事設計書と技適証明発行願の送信機の欄に技術基準適合証明書番号を記載すれば、送信機系統図などの記載を省略することができます。この場合、記載事項は下表の＊1・＊2・＊3・＊4のみを記入します。

無線局事項書及び工事設計書（裏面）

周波数帯	空中線電力	電波の型式
＊2	＊3	F3

項目	第1送信機
技術基準適合証明番号	＊1
送信空中線の型式	＊4
その他の工事設計	電波法第3章に規定する

技適証明書発行願

2. 送信機

送信機番号	技適証明送信機に貼られている「技適証明ラベル」の記号番号
第1送信機	＊1
第2送信機	
第3送信機	
第4送信機	
第5送信機	
第6送信機	
第7送信機	
第8送信機	
第9送信機	
第10送信機	
送信機の台数	

（＊：個別の技術基準適合証明番号）

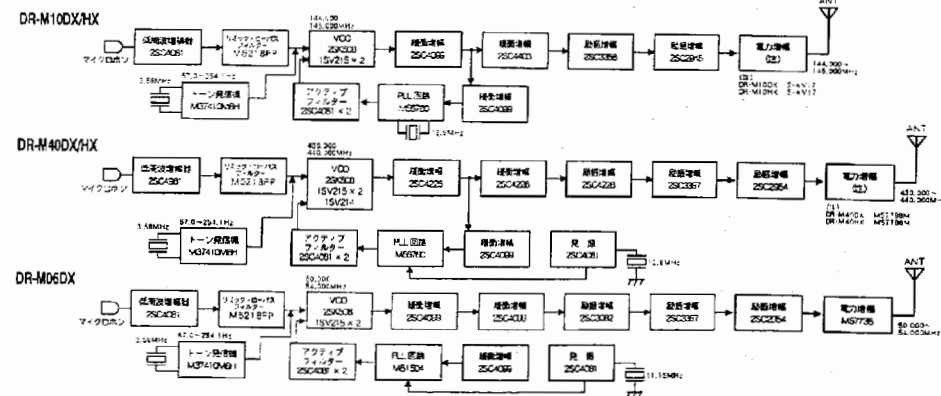
箇所＼モデル	DR-M10DX	DR-M10HX	DR-M40DX	DR-M40HX	DR-M06DX
＊1	KV220-----(＊)	KV040-----(＊)	KU221-----(＊)	KU049-----(＊)	KV219-----(＊)
＊2	144M	144M	430M	430M	50M
＊3	20	50	20	35	20
＊4	使用する空中線の型式を記入してください				

＊1は、トランシーバー本体に貼られている「技術基準適合証明ラベル」の番号をご記入ください。

送信機系統図

DR-M10DX/HX

DR-M40DX/HX

DR-M06DX

10 オプション

EJ-20U（トーンスケルチユニット）

本ユニットを取り付けることにより、トーン機能が強化されます。通常運用時にはトーンエンコーダーとして送信のみ可能であったものが、トーンデコーダーとしても運用可能となります。運用可能なトーン周波数は、通常時とかわらず50波のなかから自由に選択できます。